

ん乃至此の如く佛菩薩の住み給ふ功德聚の砌りな
乃至無始の罪障も今生一世に消滅すべきか』と徳
孤ならず必らず隣ありとは外道尙之れを云へり、
況や法華經の行者本化上行菩薩九ヶ年の永き歲月
を費し一人の波木井公を教化し能はざるの理ある
べしや。法貴きが故に所貴し、所貴きが故に人貴
しと。須彌山に近づく鳥たる波木井公金色ならず
して夫れ何ぞや。若輪番を改めし事聖意に契はず
とならば、何んぞ宗祖自ら黙し給ひしぞ。盡未來
までも心は身延山にすむべく候と宣ひしに非ずや
若し栖神ましまさざるが故と言はゞ、國主法華經
を信せざれば、日本國中何れの所にも栖神ましま
さざるべきか、其の義あるべからず、

吾人は此の意によりて師の離山は波木井公謗法
の故にはあらずして、何事か深き理由の存するも
のなる事を信すると共に、宗祖滅後幾何ならずし
て六上足の相反目せりと云ふを疑ふ者なり。

佛教に及べる上代 印度の宗教思想

荒木 經明

佛教が在來の宗教に對して有する特色は、其信
行の中心を佛陀の人格に在り而も其思想觀念の構
成並に材料はヴェダに淵源して實在と生死と解脱
の三點に集中せり。此三に關してヴェダ思想を明
かにするは佛教思想の基く所を明かにすると共に
又其出藍の特色を辨別する所以なり、所謂佛教は
宗教その者にして今日其勢力の實大あるは何が故
ぞ、佛陀の宗教は高貴に非ずして一般平民的にし
て、徒らに高遠に非ざると同時に佛陀の教は人間
向上の大道である故に『佛教が當代及び爾後數千
載の民衆に偉大なる感化を與へし所以の者は、佛
陀の瞻仰すべき人格に因る事多くして、其教義に
因る事は寧ろ少しと爲す』とは東洋學者のマクス
ミュラーの佛陀の讚美の言あり。

而して宗教は人間の心靈の救濟解脫を本質とするものにして、其信行を築かん爲めの諸種の哲學的思想理論的概念は一つの附屬物にして、生命ある宗教を理論に翻譯したるに外ならず、されば佛陀の宗教は心靈的自覺に存し、その興隆は佛陀の人格的勢力に出でたり、要するに佛教は佛陀の人格に淵源して其信仰證悟を生命とするものなり。

若し純粹に哲學の理論を以てすれば、佛教必ずしも其宇宙はウバニシヤドに鍛鍊したる觀念界を出でず、婆羅門が其思想の深遠に對して國內に限られるに反し、佛教が印度に於ける何れの宗教よりも優れ、其宗教的感化に宏大無邊の根本原動は佛陀の心靈的自覺に存するなり。佛教の理想たる涅槃もそれに到達する信と行とも大体に於て婆羅門に異ならずと雖も、理想と理論と實行と相合して佛教の宗教を爲し、特に一人格に對する信仰を發揮したる點は印度の宗教並に世界の宗教史上に一異彩なり。されば此に三千餘載を照破して歸依渴仰せらるゝあり。實に『天上天下唯我獨尊』たる

佛陀は偉ある哉。

今暫く佛教に及ばせる上世の宗教の信念思想を觀察せば、印度民族が中亞細亞高原を出で、西北印度に土着せる以前より其地に住する土民を征服し放逐して土着したる勝利者たるを以て勇氣及び自信力強く新進の英氣は充滿し至り、而して上下を隔てず自由快活を樂しみ、著しき自然現象を禮拜して讚歎歌詠せり。其記憶に依り後世に傳へる者をヴェダと云ふ、是れ最も當時の信用すべき材料のみならず、人心發展の後を尋ね、宗教思想變遷を探る事の出來る世界最古の文學あり。印度一切の教學の源泉を爲せるヴェダの神話中には難多の神ありて、其神々に就きての思想信仰を神話として發表したるあり。其信仰は天然の轉變に従ふて多面に向ひ彼此の神と隨時に動き多神を崇拜せり、さればヴェダの宗教を一言に言はゞ、自然崇拜、而かも多神教にも非らず、對等の尊嚴を有する邊より一神教の如くなれども、多神の中心の交換され神中に上下の區別の存せざる如きに至るが

如き、實に他に其例を見ず、故に學者是れを科一神教又は交換神教と云ふ。而してヴェタの思想家は單なる者に非らず司祭僧侶たりき。此に於て彼等は其宗教的信念を先づ祭儀行事の敬虔に發見し又其祈禱熱誠の中に之を経験したり、彼等の神に對するや、服従に非らずして犠牲を供し、供物を以て神意を動かし得べしと信せるなり。神は偉大あり。されど其れを動かす力有る祈禱は偉大ありとせし點より、遂に祈禱を進化せし者がブラハマーンとあり、是れが哲學上にも宗教上にも第一位を取るに至りしを以て是れを証し得べし、斯くしてヴェダ時代を去りてブラハマナー時代に來れば天真爛漫たる宗教は一變して、複雑極まる形式的の者となれり。ブラハマナーとはヴェダを説明しヴェダに隠れたる意味を發揮せんとする主旨よりしたる註疏文學にして、甚だ繁雜なるものなり。之れを行ふには専門的の智識必用と共に、僧職に從事するもの増加するに至りたり。蒙昧時代淳朴な民は供犠祈禱を重したれども、複雑あると共に

僧權の割據時代となり、他人の窺知する能はざるに至らしめて、權力を恣に成したるは婆羅門族なり。而して此に干載動かすへかざる四性の階級制度を現出せり。此時代の興味ある神話は甚だ多し、是れが起原を尋ぬれば多くは言語の説明よりせるに似たり。而して其説明たるや古代の事とて畢に空想に走りて少しも實驗思察飾らざる故に神話的の域に進入し、輪廻轉生を信ずる彼等の説明が科學的ならずして神秘的に傾くは自然の數なり。蓋し婆羅門は森林に入りて觀想を凝らすを以て人生の必要の事項と成せり。然れども遂に無限の生命を自己に實現せんとする人心に終局の満足と與ふる事能はず、神秘思想は次第に成熟して哲學化し來り、式次は彌よ／＼繁雜となりたり、ヴェダの末葉時代にてアートマンとブラハマンの二大思想は進んでウバニシャド時代に至り此思想を發達せしめ、印度教學の光彩たらしめたり。

ブラハマンは即ち梵の觀念あり、是れを現實に示さば言語にして、神話的には祈禱主なり、又主

觀的に觀れば主觀の奥底ある『我』一切生氣の根本なる呼吸なり、印度民族は我れと呼吸との實体をアートマンと稱せり、而してアートマンは認識の主客を超絶して又是れを包括す、單に知るに非らず知らるゝに非らず、知る者と知らるゝ者と同一体なるが故に其知は絶對の認識なり。翻て見れば『我』の外ならず、此思想は即ちヴェダの祭法宗教より出でし最高の思想にしてウパニシャド哲學の中心觀念あり。此のウパニシャドの見たる實在は諸法實相の方面に重きを置き、而して佛教に置ける諸法實相の觀念は既に此に萌芽し、佛陀の内証知見は茲に根抵を据へて其自覺信仰たるを見るべし、尙ほ佛教の重要ある思想として後世に至る迄特色として遺りたるは無我(アートマン)の教旨なり、印度アールヤ民族の固有の考へは靈魂實有とせり、然れば輪廻の説も極めて物質的に説明せられ來るを以て知るべきなり、然るに佛陀は全然に是れに反對して無我の説を主張せられたり、是れは即ち吾人の宗教思想を満足せしむるに在り。

ウパニシャドの哲學が觀念主義の立場より實在を求め差別以上の實在、小我以上の大我、アートマンを理想とするも、ヴェダ時代の單純ある自然崇拜の宗教に基く者にして、所謂單純ある宗教より高尚なる宗教に出で來りしと雖も、ウパニシャド時代は未だ純粹に精神的發心悟道の再生の轉機を見るに至らざりき。然るに佛陀は此間に起りて内觀知見の修行に一切の實相を洞見し、一切衆生の道を發輝して茲に不死の門を開くに至り、而かも印度思想の通性を漏れず其信行の第一着手を智慧知解に求め、事物の真相を究めてその確信の上の信仰を築かんとせり、されば佛教は宗教として佛陀に對する信賴を根本とせり。

吾人は速かに佛陀の足跡を尋ねて正しき信仰を保ち、正しき意を有じ眞を悟り正しく行ひ正しき生活をなす勉強努力し正しき念を持ち正しく靜慮せば、彼の呼吸に參すべく、而して彼の生命に接觸せねばならぬ。

嗚呼偉ある哉佛陀。その教法を活かし、その感

化の中心となりし人格また光輝燦爛たり。

宗教と宗教この管見

中 村 義 明

人誰か心靈の慰安を樂しまざるものあらん。而してそが要求に應じて、吾人に安心を得せしむるもの、是通途言ふ所の宗教なり。凡そ宗教に内外の二道あり。外道とは婆羅門、基督、神道、儒教、道教等佛教以外は一切教宗を總稱し、内道とは佛教に名くるなり。今外道は之を措く、佛教は、釋尊一佛の所説なるに、然るに古來數多の宗を作し、宗又各々數派を分つに至れり。こは、之れ佛教々義の寛容廣大ある時に應じ、國に應じて機根に優劣差異あるが故に佛説も隨つて大小權實等種々の教經を説かれたるに由る。此れ宗教は必ず教判を立て、宗旨を定め、依經立宗するの必要ある所以也。而して諸宗の元祖、或は教によりて時を忘れ或は機によりて國土を省す、或は時を見て機を詮

めす等、しかも自見を本とせるが故に、其撰擇せし教義も佛意に叶はず、終には人世を益すること能はざるもの多きなり。然るに吾宗の教判は、本化大士三説超過の法華經に基き、教機時國序の五義を立て、一切教法界を批判し玉へば、内外諸教の權實、眞偽、宛も掌中に見るが如し。かくして撰出せられたる宗旨は、末法唯一の大法たる本門の三大秘法にして、寔に五綱に非ずんば本化別頭の教相を判ずるに由無く、三秘に非ずんば、本化別頭の宗旨を定むるに由無し。かるが故に古來本宗にては、三秘を宗教と名け、五綱を宗教と稱し、合せて八個の大事として珍重せり。されば今言ふ所の宗教は、通途の謂にあらす。次下少しく宗教(五綱)と宗教三秘とに就いて吾人の管見を述べんと欲す。

一、明教 一切教法の異同を分別して、依經を定め、歸宗を明むる所以也。而して本宗の教判は釋尊出世の本懷たる法花經に根據し、一往天台の五時八教に依ると雖も、再往は本化獨歩の妙判を